



昨今、制服少女たちはメディアをにぎわし、各地で地域振興キャンペーンをも盛り上げている。制服フェティシズムが、現在ほど大きく消費を刺激している時代はかつてなかったのではないだろうか。当然ながら、制服、あるいは制服的なものは古今東西に遍在してきた。制服を民族学してみようではないか。

みんぱくの制服

梶永真佐夫 民博 研究戦略センター



現在では動きやすい制服が採用されている。受付だけでなく展示場の見回りなど、立ち仕事もふえたせいもある

みんぱくで研究者の服装は自由である。館員の身だしなみを重んじた初代館長梅棹忠夫は、館員がいかにも研究者っぽく白衣で館を歩くのは嫌ったとさえ聞く。だがご存じのように、みんぱくにも制服の人たちがいる。本コーナーの第二回は、そう、来館者を笑顔で迎えるあの人たちの制服についてである。

一六年周期のテーマ

本誌でみんぱくの制服を取り上げるのは一六年ぶりである。

そのころ、なにがあったのだろうか。覚えていらっしゃる方も多いかもしれない。開館二〇周年（一九九七年二月）を目前にして、みんぱくの

その前の記事はというと、くしくも、さらに一六年前の一九八〇年一月、開館三年目にして、はじめて案内スタッフ（正式には「展示案内学習支援業務担当」）の制服がかわったときである。グレーのワンピースから、ワインレッドのブレザー・スーツになった。

その半年まえの三月号でも、「縁の下の力持ち」という記事で、清掃、警備案内所のかたがたの仕事が紹介された。しかしこのときクローズアップされているのは、なんと警備員さんの制服であった。キャプションに「この仕事にはきびしさとやさしさの両方がひつようだとか」。別の写真のキャプションには「いちばん目がはなせないのが中・高校生の団体とのこと」とある。当時は家庭でも教育現場でも、権威と管理に叛旗を翻した若者たちの暴力が問題になっていた。

お気づきのように、現在の展示場は、案内スタッフの女性たちが見回っている。もう腕つぶしは必要ないだろうということになったのか。この二〇

年の変化である。

制服を着てみる

残念ながら案内スタッフの初代の制服は、当時の現場の写真掲載できなかつた。「誰もモデルがいらないなら自分が着る」と筆者ががんばってみたが、みんぱくと本誌の品位を損なうと強硬に拒絶され、ひきさがるほかなかつた。身にまとうことで時代感情のようなものが体験したかつたと言え、いかにも言い訳がましいだろうか。ある制服を着ること、それはある時代の、ある社会の脈絡や役割に自分をあてはめること、あやふやな「わたし」がなにかになることなのである。

民族学者はそれぞれのフィールドで、どんな制服の人たちと接しているのだろうか。その制服から、なにが見えてくるのだろうか。



20周年を機に警備員の制服も一新された。案内スタッフの制服はカラフルに（本誌1997年2月号より）

1997年



当時は「案内嬢」とよばれていた。慎ましやかで清楚なイメージの制服（本誌1980年11月号より）

1980年



初代のみんぱく案内スタッフの制服から、70年代のスーパーヒーローを思い出す人がおおい

1977年 みんぱく開館